

1 得点分布及び小問ごとの正答率

〈表1〉得点分布

得点	人数	
	人数	%
100	0	0
90～99	12	1.8
80～89	48	7.2
70～79	118	17.6
60～69	147	21.9
50～59	146	21.8
40～49	104	15.5
30～39	59	8.8
20～29	24	3.6
10～19	12	1.8
1～9	0	0
0	0	0

*合格者の中から、無作為に抽出した670名(12.4%)の結果である。

〈表2〉小問別正答率(%)

大問	小問	正答率	
一	問一	88.5	
	問二	92.5	
	問三	43.3	
	問四	72.4	
	問五	52.5	
	問六	58.8	
小計		66.5	
二	問一	84.2	
	問二	77.6	
	問三	68.5	
	問四	24.0	
	問五	55.5	
	問六	35.1	
小計		54.2	
三	問一	61.1	
	問二	19.1	
	問三	57.9	
	問四	44.2	
	問五	21.9	
	問六	61.9	
小計		46.9	
四	問一	(1)	59.7
		(2)	82.7
		(3)	86.9
		(4)	65.9
		(5)	84.3
		(6)	25.3
		(7)	67.0
	問二	64.6	
	問三	68.5	
	小計		67.2

2 分析結果の概要

(1) 大問別正答率の経年比較

大問	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度
一 文学的文章	58.6	77.4	68.4	69.6	66.5
二 説明的文章	61.2	68.6	58.2	53.7	54.2
三 融合(古典・表現)	63.2	49.7	51.3	38.8	46.9
四 言語事項・書写	74.4	73.7	70.4	67.8	67.2

(2) 正答率の高い問題 (四の問一を除く)

正答率	問題番号	問題内容
92.5	一の問二	文章の展開に即して、適切な語句(心情語句)を選択肢の中から選ぶ。
88.5	一の問一	文脈に即して、適語(副詞)を選択肢の中から選ぶ。
84.2	二の問一	文脈に即して、適語(接続詞)を選択肢の中から選ぶ。

(3) 正答率の低い問題

正答率	問題番号	問題内容
19.1	三の問二	平家物語の冒頭文を暗誦し、書き表す。
21.9	三の問五	推敲後の文章から、推敲の際になされたアドバイスを類推し表現する。
24.0	二の問四	論の展開に即して内容の違いを的確にとらえ、要約、説明する。

(4) 得点分布、正答率からみた傾向

得点分布において、70点以上の割合が昨年度と比べ5.4ポイント上がり、高得点者がやや増加している。大問別の正答率では、四の言語事項・書写問題が最も高く、三の古典・表現の融合問題が最も低い。昨年度と比較すると、二・四はほぼ変わらず、一は正答率がやや下がり、三では正答率がやや上がっている。

小問別において正答率が高かったのは、一問一・二の、副詞や心情語句を選択する問題、二問一の、接続詞を選択する問題である。正答率が特に低かったのは、三問二の、平家物語の冒頭文を暗誦し、書き表す問題、問五の、書きかえられた生徒の発表原稿をもとに、先生からのアドバイスを類推し、表現する問題である。また、二問四の、キーワードの内容とその違いを説明する問題も正答率が低かった。全体として、思考力、判断力、表現力等を要する問題に課題がみられた。

3 小問ごとの内容及びねらい

大問	小問	内容	出題のねらい	出題形式			評価の観点			
				記号選択	抜出	記述	話すこと 聞くこと	書くこと	読むこと	知識理解
二	一	文学的文章	文脈に即して適語（副詞）を補充することができる。	○					●	●
	二		文章の展開に即して適切な語句（心情語句）を補充することができる。	○					●	●
	三		文章の展開に即して登場人物の心情をとらえ、適切な朗読の仕方を、選択肢の中から指摘することができる。	○					●	
	四		文章の展開に即して内容を的確にとらえることができる。	○					●	
	五		文章の展開に即して心情の変化とその理由をとらえ、表現することができる。			○		●	●	
	六		表現の仕方や文章の特徴を的確にとらえることができる。	○					●	
三	一	説明的文章	文脈に即して適語（接続詞）を補充することができる。	○					●	●
	二		論の展開に即して内容を具体的に説明した表現を、本文から指摘することができる。		○				●	
	三		論の展開に即して文章の構成や組み立てをとらえ、文を正しく挿入することができる。	○					●	
	四		論の展開に即して内容の違いを的確にとらえ、要約、説明することができる。			○		●	●	
	五		論の展開に即して内容をとらえ、要約することができる。			○		●	●	
	六		論の展開を確かめながら、文章の要旨と照合して適切な内容を、選択肢の中から指摘することができる。	○					●	
四	一	融合（古典・表現）	古文の特徴的な表現を、本文から指摘することができる。		○				●	●
	二		平家物語の冒頭文を暗誦し、書き表すことができる。			○			●	
	三		古文の展開に即して内容をとらえ、表現することができる。			○			●	
	四		古文の表現の仕方や文章の特徴に注意して、適切な朗読の仕方を、選択肢の中から指摘することができる。	○					●	
	五		推敲後の文章から、推敲の際になされたアドバイスを類推し、表現することができる。			○		●	●	
	六		条件を踏まえて、自分の意見が相手に効果的に伝わるように、根拠を明らかにして表現することができる。			○		●		
四	一	言語事項・書写	学校教育用の漢字を正しく書くことができ、常用漢字を正しく読むことができる。			○				●
	二		敬語の種類の違いを識別することができる。	○						●
	三		行書とそれに調和した仮名の特徴を、選択肢の中から指摘することができる。	○						●

4 標準解答及び考察



〈標準解答〉

問一	ウ
問二	エ
問三	エ
問四	ア
問五	(例) 祖母が、私のために大切な箱を切ってまで帯板を作ってくれたので、その思いに応えようという気持ち。
問六	イ

〈考察〉

母から浴衣を着せてもらった時の出来事を回想的に述べ、巧みな会話表現や人物描写により、幼い頃の「私」の心情を鮮やかに表現している素材を通して、文学的文章の読解力をみる問題である。具体的には、副詞や心情語句、朗読の仕方など、文学的文章を読むための基礎力や、叙述に即して、表現の意味や特徴、登場人物の心情や主題を的確に理解し、表現する力などをみる。また、豊かな心を育てるという観点にも配慮されている問題である。

文学的文章分野の全体の正答率は66.5%であり、昨年と比較してやや低くなった。小問別では、心情語句を選択肢から選ぶ問二、副詞を選択肢から選ぶ問一は正答率が特に高かった。また、会話文の内容を的確にとらえ、選択肢から選ぶ問四も正答率が高かった。しかし、登場人物の心情をとらえ、適切な朗読の仕方を選択肢の中から選ぶ問三、主人公の心情の変化とその理由をとらえ、表現する問五、表現の仕方や文章の特徴を選択肢から選ぶ問六の正答率が低かった。

問三は会話文から「母」の気持ちを想像する問題である。受検生の解答にばらつきがみられた要因として、前後の文脈や登場人物の発言から心情を読み取る力の不足、選択肢の中にある「気をもたせる」「当たり散らす」「丸め込む」「有無を言わせない」などの語句の意味に対する理解不足が考えられる。問五は「私」の心情の変化とその理由をとらえ、表現する問題である。理由に当たる部分「祖母が、大切な箱を切ってまで帯板を作ってくれたこと」と、心情に当たる部分「祖母の思いに応えようという気持ち」のどちらか一方の説明に終わっているものがみられた。また「あきらめの気持ち」「うれしい気持ち」など心情の捉えやその表現が不十分な例もあった。問六は文章表現に関する問題である。解答にばらつきがあり、正答率が低かった原因としては、文章表現の特徴やその効果という視点からの読解が十分でないことや、様々な文章に触れる読書体験の不足が背景として考えられる。

全体を通しては、「文脈に即した内容の理解」に関する問題の正答率が高いが、「よりきめ細かな心情の読み取り」や「表現の仕方」に関する問題の正答率が低かった。そこで指導に当たっては、次の三点に留意する必要がある。

- ・ 登場人物の行動や心情の変化などについて、本文の表現を手がかりにしなが、生徒の多様な読みを引き出し、検討・吟味する授業展開を工夫すること。
- ・ 読みの視点を与え、なぜこのような書き方をしているのか、どのような工夫をしながら書いてあるのかなど、表現の仕方や効果にも着目させること。
- ・ 授業で扱った教材に関連する文章や本を紹介する、学校図書館等を活用して生徒の読書活動を積極的に促すなど、多様で良質な文章表現に触れさせる機会を増やすこと。



〈標準解答〉

問一	エ
問二	よいことを習慣化
問三	イ
問四	(例) 絶対語感とは、地域や世代で差があり、さらに、個人によっても微妙に差があるという点で、ほぼ誰にとっても同じものである絶対音感とは違うということ。
問五	(例) いままで聴いたこともないことばであっても、理解できたり、使えたり、自分で新しい言語表現を生み出すことができたりする効果。
問六	ア

〈考察〉

幼いときに習得する言葉は「絶対語感」ともいべき言葉の根本を形成することを、効果的な具体例を用いながら、論理的に分かりやすく述べている素材を通して、説明的文章の読解力をみる問題である。具体的には、接続詞や対比の視点の活用、文章構成の把握など論理的に読むための基礎力や、論の展開に即して内容を正確に読み取り要約する力、全体の要旨をとらえる力等をみるとともに、論理的な考え方を養い、視野を広げるという観点にも配慮されている問題である。

説明的文章分野の全体の正答率は54.2%とほぼ昨年並みであった。小問別では、接続詞を選択肢から選ぶ問一、本文の内容を端的に表現した部分を抜き出す問二は正答率が高かった。しかし、キーワードの内容とその違いを説明する問四、本文の内容をとらえて要約する問五、本文の内容と合致する文を選択肢から選ぶ問六の正答率が低かった。

問四は傍線部の内容について、絶対語感と絶対音感の違いを明らかにしながら説明するという問題である。絶対語感＝社会・世代・個人によって差がある、絶対音感＝どこでも誰にでも共通であるという対比の構造に気づき、説明する点に不完全なものが目立った。誤答の多くは、絶対音感＝訓練が必要、絶対語感＝無意識に身に付くというものであった。絶対音感が「物理的同一性をもつ」ことについて具体的に説明している部分が本文になく、文脈から類推しなければならないため、「社会性を帯びているという点で」という問いの条件を踏まえずに説明したことが原因と考えられる。問六は「エ」を誤って選択したものが多かった。選択肢の中の「規範」「原理」「語彙の法則」などの語句の意味をとらえきれず、本文の内容との比較検討が十分でないまま選んだものと考えられる。

全体を通しては、「文脈に即した内容の理解」に関する問題の正答率は高いが、「文章の趣旨の理解や要約」に関する問題の正答率が低かった。そこで指導に当たっては、次の三点に留意する必要がある。

- ・ 文章の内容理解だけでなく、文章の形式（論述の形式や論理の整合性など）にも着目させ、文章全体の論理展開と主張をとらえさせること。
- ・ 平素から、比較的長めで論理性の高い文章を読ませ、文章の一部分または全体について、その要点をまとめさせる場を多く設定するとともに、根拠を明確にししながら自分の考えや意見を述べさせること。
- ・ 説明的文章の中で使われる抽象的な概念を表す語句等に慣れさせ、設問の条件や字数制限に合わせたまとめ方を意識させること。



〈標準解答〉

問一	ひやうど（ひやう）
問二	祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。
問三	（例）扇を射損なったら、自害する
問四	ウ
問五	最初に話題を示し、文は一文を短くする。
問六	（例）私は古典を読むことはつまらないとは思いません。私は以前、「奥の細道」の、平泉の文章と俳句を読んで、今見ている景色も、過去の歴史を知って見てみると、全く違う感じ方ができることに感動しました。このように、昔のことや先人のものの見方、考え方を学べるし、現在にも通じる新しい発見もできる点に魅力を感じます。

〈考察〉

自分が興味をもった本を、クラスの友達に紹介するために発表原稿を書き、先生のアドバイスを受け、原稿を修正するという授業場面の設定を通して、古典の表現や内容を理解する力、文章を効果的に活用する力、自らの体験を根拠に自分の考えを表現する力をみる問題である。素材として、教科書で既習の平家物語を出題している。具体的には、効果的な表現技法、古典の特徴を生かした朗読の仕方、冒頭文の暗誦や心情の把握など、古典に対する興味・関心や、古典を読むための基礎的な力をみている。また、推敲した文章から必要な情報を読み取り、効果的に活用して表現する力、与えられたテーマについて自分の考えをまとめ、条件に従いながら表現する力などもみている。読書指導や古典の優れた表現を味わうという観点にも配慮されている問題である。

融合分野の全体の正答率は46.9%であり、昨年度と比較して高くなった。小問別では、擬音語を文中から抜き出す問一、古典を読むことの意義について、自分の立場や意見を明確にししながら根拠を明らかにし

て表現する問六は正答率が高かった。しかし、平家物語の冒頭を暗誦し、書き表す問二、書きかえられた生徒の発表原稿をもとに、先生からのアドバイスを類推し、表現する問六の正答率が低かった。

問二は音声的に表現できていれば可とする問いであったが、完答は非常に少なく、無解答も多かった。問五は解答の二つのポイント「話題の提示」「短文」のうち、一方だけについて述べたものが多かった。

この問題で設定されている学習活動は、ブックトークを通じて読書に対する興味・関心を高め、原稿の作成や発表を通じて表現力の育成を目指す中で行われるものであり、日常の授業の中で、生徒自らが考え既習の知識や技能を活用して表現する場が設定されているかが問われるものである。また、ブックトークで紹介する平家物語「扇的」の場面は、中学校の教科書にも掲載されており、日頃の授業をいかに大切にして取り組んでいるかが問われる問題でもある。そこで指導に当たっては、次の三点に留意する必要がある。

- ・ 古典を読むための基本的な知識や技能の定着とともに、日頃から音読・朗読などを通して古典に親しませ、古典特有のすぐれた表現や文章のリズムを実感させる授業展開を工夫すること。
- ・ 資料等から必要な情報を読み取る、古典を鑑賞するなどの読む学習と、それについて自らの考えや意見を書くなどの表現の学習の場を設定し、書く際には、与えられた条件を基に的確に表現させること。
- ・ 普段から読書活動や多様な言語活動を行い、日常の自己の言語生活を豊かにする意識をもたせること。

四

〈標準解答〉

問一	(1) つくろ(う) (2) すいこう (3) ばいたい (4) 機関 (5) 危険 (6) 採る (7) 挙げる
問二	イ
問三	イ

〈考察〉

文字力、敬語の種類、書写の基礎的な力をみる問題であり、日常の言語生活において使うことを前提として出題することで、言語生活の向上を図るという観点にも配慮されている問題である。

言語事項分野の全体の正答率は67.2%と昨年並みであった。小問別では、問一の漢字の読みと書き取りの問題の正答率は67.4%であり、昨年度より9.9ポイント低くなった。特に(6)「採る」の正答率は低く、異字同訓の漢字の書き取りに課題が見られた。誤答としては「取る」が多く、文脈から正しい漢字を判断し、書き取る力が不足していると考えられる。問二は敬語の具体的な用例から、その種類の違いを識別する問題であるが、正答率は64.6%と高くはなかった。文法事項の学習を、形式的な知識の習得に終わらせず、日常生活の中で活用する場面を想定して考えられるかどうかが問われるものである。そこで指導に当たっては、次の三点に留意する必要がある。

- ・ 漢字を読んだり書いたりすることは、文字情報理解の基礎であるので、語彙指導の形態で取り出して指導することはもちろんのこと、読書活動等においても日常的に指導していくこと。
- ・ 文法指導においては形式的な指導になることのないように、文脈の中における働きや活用に注目させ、さらに文法の理解を他の言語活動における理解や表現に役立てるよう工夫すること。
- ・ 言葉そのものに対する興味・関心を養い、言語生活を豊かにしていくための指導を日常的に継続して行うこと。